

目指す学校像・育てたい生徒像（スクールポリシー等に基づいて記載する） 校訓「自主・自律・敬愛」のもと、地域の全日制普通科高校としての地域から求められる役割を果たすため「生徒が確実に成長すること」を第一の目標とし、「社会でよりよく生きる力を持った生徒が育つ学校」を目指す。 基礎的教養の形成と規範意識の向上から、地域社会において自他を尊重し多様な人々と協働できる生徒を育て、健全で持続的な発展を担う職業人として地元和歌山で活躍する人材を育成する。	学校評価の公表方法 自校ホームページに掲載	現状・進捗度	A	十分に達成している。（80%以上）
			B	概ね達成している。（60%以上）
			C	あまり十分でない。（40%以上）
			D	不十分である。（40%未満）

自己評価（分析、計画、取組、評価）							学校関係者評価（1月17日実施）
番号	計画・取組				評価（3月24日現在）		○生徒による学校評価の結果から 昨年度の結果と比較し、ほとんどの項目で肯定的な回答をしている。 特に、学校生活全般に関しては、肯定的な意見が多い。また、校則違反等に関しては厳しい指摘が多く出ており、自分たちの学校をよくしていこうとする姿勢を読み取ることができ、今後も楽しみである。 ○外部（保護者）からの意見から 本校の教育活動については、地域の方々から一定の評価をいただいている。また、本校PTAの方々からも同様な評価をいただき、多大なる協力もいただいている。今後は、生徒の成長がしっかり読み取れる取り組みを地域やPTAとともに創造していかなければならない。 ただ、学校評価の保護者からの回答率が非常に低いので、その点を改善し、学校改善に生かす取り組みも必要である。 ○生徒による授業評価の結果から 授業内容や授業方法・授業への取り組み等については肯定的な意見が多く、ここ数年増加の傾向にある。これは、教員が生徒に寄り添った授業を工夫し、実践できている成果であると考える。 学校設定科目である「教養基礎」は、生徒の基本的生活習慣の確立を目指す上で、不可欠な科目であり、その内容もタイムリーな社会情勢をテーマにするなど、社会生活を生き抜く上での必要ことを学習でき、有用である。 一方、家庭学習については、テスト期間中であっても全くしない生徒も多く、生徒の学習環境も含めた問題解決と学習意欲向上に向けた取り組みは、まだまだ必要である。
	重点目標	現状	具体的取組	評価項目と評価指標	進捗度	進捗状況	
1	主体的に学ぶ意欲を向上させ、基礎的教養を形成する。	B	・少人数学級を編成し、生徒個々に応じて丁寧に指導することで中途転退学及び原級留置者の減少に繋げる。	・中途転退学及び原級留置者数を年度当初生徒総数の8%未満。	C	引き続き少人数学級を実現できているが、中途転退学者は10.7%となった。	
			・基礎学力の定着を目指し、校内支援体制（面談・教育相談・SC・SSW）の活用とともに積極的に保護者と連携を図り、実態の把握に務める。 ・生徒個々の学力に応じた学習指導を組織的に進めていく。	・生徒の情報を家庭と共有するための積極的な連携ができているか。 ・原級留置規定に接触する者を出さない教育実践を進める。	B	成績不振者の割合は、前年度とほぼ変わらなかった。原級留置から再学習、通信制への転学などがあった。一方、家庭との密接な連携や教員相互の情報共有は十分できている。	
2	ルール・規則を守る（自律する）力を育てる。	B	・生徒の規範意識の向上を図り、生徒個々の情報共有から問題行動を未然に防ぐ取組を進める。	・特別指導及び懲戒処分件数を年度当初生徒総数の30%未満。	B	・今年度は、指導件数が昨年度の約半数となった。未然防止指導の効果がでてきている。	
			・薬物乱用や喫煙の防止への啓発活動を充実する。	・薬物に関する講演会の年1回以上の実施及び喫煙防止への啓発通信の月1回の発行。	B	喫煙防止のための教員巡回指導等を積極的に行ったが、効果を得ることができなかった。	
			・アセンブリを中心に集団への帰属意識の向上を図る。	・学年別アセンブリを学期に2回以上実施。	A	各学年ともタイムリーなアセンブリを展開でき、指標どおり実施できた。	
3	自他を理解して協調する力を育て、自己の将来設計を支援する。	B	・中学校訪問や生徒面談及び家庭との積極的な関わりにより、生徒個々の環境や課題について理解、把握に努める。	・生徒の情報共有のための学年会議を月1回以上実施。	A	学年会議の月1回開催は、定着し、生徒の情報共有の場として重要となっている。	
			・生徒自身が自己の将来を描くことができるようなキャリア形成支援を行い、個々に応じた適切な進路指導を実践する。	・早期（入学時）からの計画的な進路指導体制の確立と学期に2回以上の進路LHRの実施。	B	現在の進路指導体制は、生徒に非常に手厚く、将来を見据えさせることができしており、よりよい指導ができている。	
4	部活動の積極的な参加推進と地域のボランティア活動への参加を奨励する。	B	・部活動離れを止めるために教員の働きかけも含めた積極的な活動参加を促す。 ・生徒会活動を活性化し、地域との連携・協働から、ボランティア活動の機会を十分持つ。	・部活動実活動数を全校生徒の4割以上。 ・ボランティア活動参加者数年間のべ100名以上。	C	生徒数の激減とともに部活動への加入率も減少しており、全国レベルの部活動も同様である。 生徒会活動は、できてきており、今後も継続していく。	生徒支援を軸として、保健・人権・特別支援教育部の役割が重要となる。「入学から卒業まで」をしっかりと見据えて教育活動を推進していく。 部活動や生徒会活動が活性化することは、自己肯定感や自己達成感を高めることにつながるため、特に、重要と考えしっかり取り組んでいく。